
願い

水神宮

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
願い

【Nコード】
N3478A

【作者名】
水神宮

【あらすじ】
生きとし生けるモノ、必ず避けられない「老い」と「死」。……でもな、じっち。オラの願い聞いてくんろ？

ゲホッ、ゲホッ……

隣にいるじっち（お爺さん）は苦しそうに咳き込み、ペットボトルの蓋を開け、汲み置きしてある水をちっと（少し）飲む。

「俺も長くねえからな。」

と言いつつペットボトルの蓋をきっちり閉める。

おら（私）は心配でたまんね。なのに、そんなおらの気持ちも知らずにじっちは、

「ばっば（お婆さん）、何ボケッとしてる。もうすぐメシの時間たべ。ほら、用意すつぞ。」

じっちは田畑を耕すのを止めてから、夕食の用意を進んでするようになった。昔からすつど、えらく変わっただな。田畑耕してた頃は「メシ作つぞ。」

なんて言った事なかったのにな。

二人で台所に向かい、夕飯作り始めるおら達。

「ばっばは目離すと危ねかな。俺が見張ってねえと気が気でなんね（ならない）。」

そう言っってガスコンロに鍋を置き、慣れた手つきで味噌汁を作り始めるじっち。

心配性だなあ。そら、おらはちつとボケてっけど、メシ作る位しっちゃもんねえ（大した事ない）。

苦笑しつつ、おらは菜っ葉を刻みながら昔に思いを馳せる。

おらはちつと土地持ちの農家の一人娘で、じっちとは見合いしてすぐ婿様としてじっちに家に来て貰い結婚しただ。

ろくに話した事もねえ人と結婚して、不安だっただなあ。じっちは始めからきかね（気性が荒い）人だった。

でも、婿様だからって卑屈になる事なく、よく働いてくっちゃ（くれた）。

雨の日も、風の日も、嵐の日も、雪の日も。

文句言いつつ、毎日、田んぼと畑の作物をまめたく（こまめに）世話してくっちゃなあ。

三人の娘と息子にも恵まれた。一番目と二番目の娘と息子はじっちにそっくりだあ。きかね所、頑固で意志が強い所。三番目の娘だけは穏やかな子だったな。おらに似ただか？

子供達が独立する迄は家人中、騒がしかっただな。いつもじっちと誰かしらは喧嘩してたからな。

なあ、じっち。半世紀以上も一緒にいただな。何度

「別れっか」

と思ったかしんね（分からない）。時代が時代だったから結婚指輪すら貰えなかった。でもな、おらはじっちと一緒にって良かったと思う。

咳き込みながら料理するじっち見てるとしんぺえで（心配で）涙出そうだ。

「ばっぱ、また菜っ葉刻み過ぎだ！！全く、ちっと目え離すとこれだ。俺が居ねくなったらどうすんだ。」

ぶつぶつ言いつつ、刻み過ぎた菜っ葉を味噌汁の鍋に放り込む。

氣い遣ってくれるのは分かってっけどな、じっち。ちっとだけ願い聞いてくんろ（下さい）。

「長くねえ」

とか

「居ねくなったら」

とか言わさんな（言わないで）。不安になるべな。いつまでも元気

でいっせ（いて）。

じっち、頼むからおら残して死なねで（死なないで）。
もうちっと二人で一緒に生きっぺ（生きよう）？
それだけがおらの願いだ…。

了

（後書き）

作者、祖父母実話にアレンジを加えました。祖母は現在、こんな事を考えられる状態ではありません。大好きな祖母の生きる証を記します。この作品は最愛の祖母へ捧ぐ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3478a/>

願い

2010年12月14日17時42分発行